

津ライスニュース 平成28年産第2報 (通算第103号)

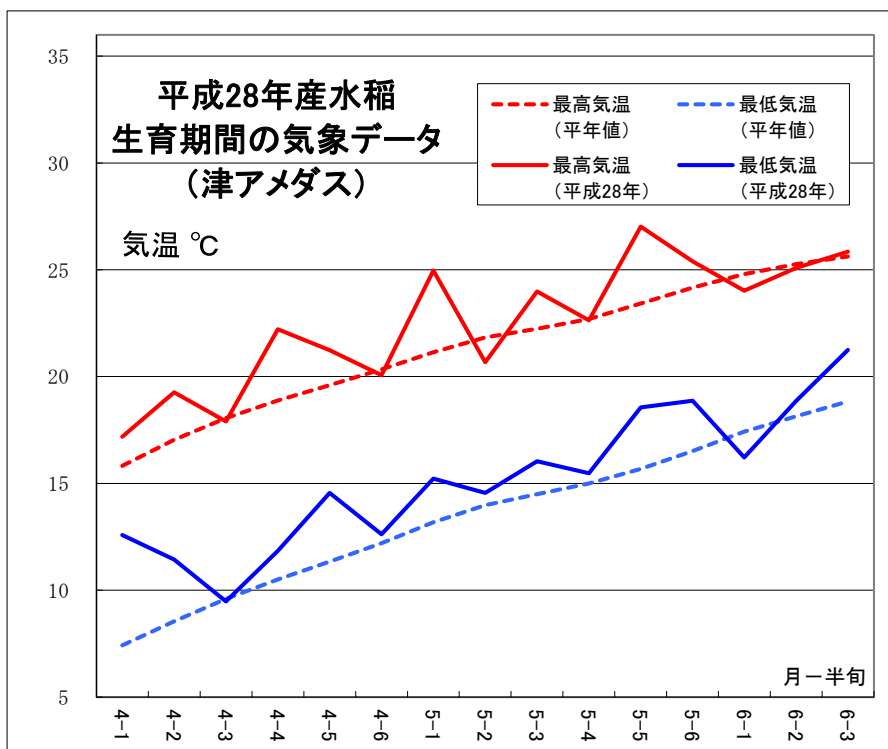
平成28年6月16日

津地域農業改良普及センター 電話:059-223-5103

気象経過

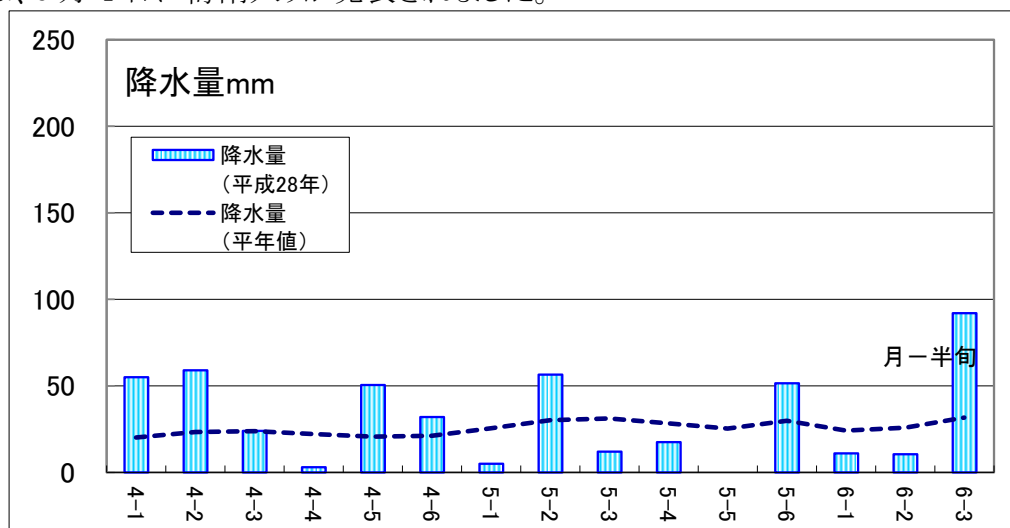
<気温>

4月以降、気温は平年より高めに経過しています(5月末現在、平年+1.5℃)。



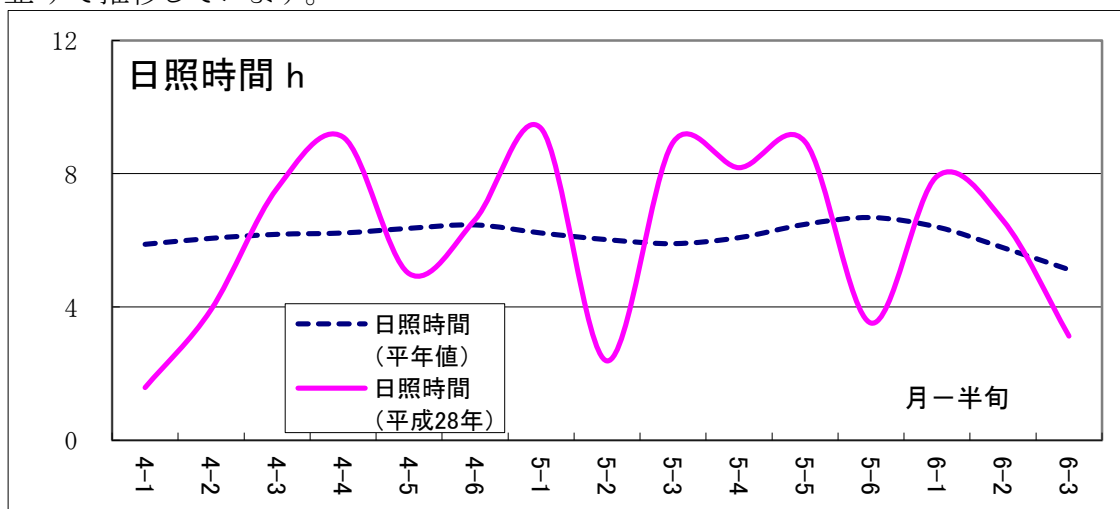
<降水量>

4月は雨の日が多く、降水量は平年より多くなりました(平年比 167%)。5月は一度に降る雨の量が多い傾向がありましたが、降水量は平年より少なくなりました。東海地方は、6月4日に梅雨入りが発表されました。



<日照時間>

4月は曇りや雨の日が多く、日照時間は平年より少なくなりました。5月以降は平年並みで推移しています。



生育の概況

本田での生育状況は、連休直前頃に田植えが行われたほ場では、強風による植え痛みが散見されました。その後、気温が高かったことから、回復は早く、初期生育は概ね順調です。

津管内の生育基準田の調査結果を昨年度の同時期と比較すると、草丈は低くなっていますが、茎数、葉齢は地域により差はありますが、平均すると同程度となっています。

○水稻生育基準田の生育調査結果

【平成28年6月14日現在】

品種	調査地点	移植日 (月.日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色 (SPAD)
				(本/m ²)	(本/株)		
コシヒカリ	殿村	4月21日	55.6	428	34	7.6	40.4
	安濃	4月25日	43.4	312	21	7.6	36.3
	一志	4月29日	47.2	414	21	8.2	38.0

【参考】前年同時期の調査結果 (平成27年6月22日時点)

品種	調査地点	移植日 (月.日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢 (L)	葉色 (SPAD)
				(本/m ²)	(本/株)		
コシヒカリ	殿村	4.21	68.2	275	23	7.7	42.4
	一志	4.25	63.4	573	30	8.2	36.6

害虫の発生状況と対策

<いもち病>

いもち病発生に適温(25~28℃)となる時期を迎えます。6月中旬以降、雨の日が続く、高温多湿で感染に好適な条件が揃う日が現れると、本田でのいもち病発生が懸念されます。

- ・補植用の置き苗は発生源となりますので、早めにほ場外へ取り除きましょう。
- ・ほ場を見回り、いもちの初発の早期発見と適期防除に努めましょう。

※出穂期に台風が通過した場合は、その直後にいもち病防除を行いましょう。

<斑点米カメムシ類等>

今後、畦畔等、ほ場周辺での発生増加に注意しましょう。

- ・カメムシ類の増殖場所となるような畦畔雑草を早めに除去しましょう。
- ・草刈りは出穂10日前までに行いましょう。(出穂直前や出穂後の草刈りは、水田への害虫侵入を助長します)

今後の栽培管理

<水管理(中干し~間断灌水)>

・中干しは移植後40~50日頃をめやすとして、茎数が確保できたほ場(コシヒカリで400本/m²、20本/株程度となったほ場)から行います。

○中干しの開始時期と強弱

- * **茎数が多い場合** →中干しを早目に、やや強く行ってください。
(ただし、田面が大きくひび割れるような中干しは、根を傷めますので避けましょう)
- * **茎数が少ない場合** →中干しを遅目に、弱く行ってください。

・中干しは幼穂形成が始まる時期までには終了し、直後は走り水とし、その後は間断灌水とします。間断灌水ができない水田は足跡に水が残る程度の水管理とします。

・出穂期も深水は避け、出穂後から収穫7日前までの期間は間断灌水を続けます。
水をかける場合はなるべく夕方にしましょう。

※水の溜めすぎは根の老化や根腐れの原因となります。(根数は出穂前20日頃に最大となり、出穂期には新根がほとんど出なくなります)

・早期落水は未熟粒や胴割れ米等が多発し玄米の品質が低下するので、落水は収穫前7日以降としましょう。(玄米の大きさは開花後25日頃に決まります)

<除草>

本年は、降雨の影響による除草剤の効果不足は少ないと思われませんが、適期防除を逃したほ場や後発のヒエや広葉雑草の発生があるほ場では、早めに後期剤を散布しましょう。(ただし、使用時期＝特に収穫前日数に注意してください)

クリンチャーバス ME 液剤・・・ホタルイ、ノビエ等

クリンチャー1キロ・・・ノビエ5葉期まで、クリンチャーEW・・・ノビエ6葉期まで

(クリンチャーはキシウスズメノビエにも効果あり)

バサグラン粒・液・・・ホタルイ等

サンパンチ1キロ粒・・・ノビエ3.5葉期まで、ホタルイ、クログワイ、コウキヤガラ等

<穂肥>

穂肥の適期に適量を施用しましょう。

※ 全量基肥肥料(一発基肥)施用田は原則穂肥を施用しない。

ただし、生育前半が高温で推移し肥効切れが懸念される場合は二回目の穂肥時期に窒素成分で 1kg/10a 程度の追肥を行います(白未熟対策にもなります)。

施肥過多は食味低下の要因になるとともに、倒伏・穂いもちの発生を助長します。

○穂肥の施用効果が期待できる稲の姿とは

- ・ 葉色が薄くて(葉色 4.5 以下)、葉が直立している。(株元スッキリ)
- ・ 地際の節が短く(第 4 節間が 3cm 程度)、茎が太い。
- ・ 過剰な分げつが少なく、草丈が 70cm を超えないこと。
- ・ 病害(特にいもち病、紋枯病)の発生が少ないこと。

○施用量の判断

*分げつが多く生育が過剰な稲 → 時期を遅らせる。量を減らす。やらない。

*分げつが少なく小出来な稲 → 時期を早める。

○穂肥の施用時期

◇一回目の穂肥は籾の退化防止、籾殻を大きくする効果が期待できます。

・コシヒカリ 出穂 18～15 日前(幼穂長 1.0～1.5cm)

・その他品種 出穂 22～20 日前(幼穂長 0.5cm)

※穂肥用緩効性肥料を使用する場合は時期を 2～3 日早め、1 回のみの施用とする。

◇二回目の穂肥は玄米を大きくする。いわゆる「実肥」的な効果が期待できます。

・一回目の穂肥施用 7～10 日後

コシヒカリの穂肥施用のめやす(資材は例)

		葉色	3.5～4.0	4.0～4.5	4.5 以上
		草丈	65 cm	70 cm	75 cm 以上
NK 化成4号 (14-0-14)	一回目		20	15	やらない
	二回目		10	10	10
IB045 (20-4-5)	一回目		20	10	やらない

○水稲生育予測

【平成28年6月14日現在】

品種	移植期	幼穂形成期の予測日	出穂期の予測日	(平年との差)
コシヒカリ	4月25日	6月27日	7月19日	(1.2日早い)
	5月15日	7月8日	7月30日	(0.6日早い)
	6月10日	7月27日	8月18日	(0.2日早い)
みえのゆめ	4月25日	7月4日	7月28日	(3.0日早い)
	5月30日	7月18日	8月18日	(0.3日遅い)
三重23号	4月25日	6月21日	7月14日	(1.2日早い)
	5月10日	7月1日	7月23日	(0.8日早い)

※三重県農業研究所作成の生育予測システムVer9.2による生育予測です。

気象庁アメダス津観測地点データ(直近10カ年の平均気温)を使用しています。

(参考)

☆穂の発達過程と日数および外部形態との関係(星川)

発達の過程	出穂前日数	幼穂の長さ	外形
穂首の分化	30日	0.2mm	止葉より下から3枚目の葉が出始める
1次枝梗分化	28日	0.4mm	
2次枝梗分化	26日	1mm	
えい花分化	24日	1.5mm	止葉より下から2枚目の葉が出始める
雄しべ・雌しべ分化	20日	2mm	
花粉母細胞分化	18日	8~15mm	止葉が出始める
減数分裂期	12日	8cm	
花粉内容充実	6日	19.5cm	穂ばらみ始め
花器内部の完成	2~1日	22cm	
開花	0日	22cm	出穂

☆葉耳間長(止葉の抽出程度)と出穂前日数の関係

出穂前 18日 → -15cm

出穂前 15日 → -10cm

出穂前 10日 → ± 0cm

(二回目の穂肥の適期)

出穂前 5日 → +10cm

